

人権なら

2020年11月1日

第119号

NPOなら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

藤田敬一さんを講師に迎え

なら人権情報センターが連続学習会

NPOなら人権情報センターは10月24日、三宅町中央公民館で学習会を開催＝写真。元岐阜大学教員の藤田



敬一さんが「水平社創立100年を前にして一部落差別・部落解放運動を語る」と題して話をした。

古川友則・理事長があいさつ。藤田さんとの長年の関係を紹介するとともに、学習会の意義を述べた。

藤田さんは「1958年6月17日」に初めて京都部落問題研究所を訪ね、木村京太郎さんと出会った。そこで朝田善之助さんへの紹介状を書いてもらう。後日、朝田さんを訪ねる。その後、いろいろな人と出会い、米田富さんとも出会う。その思い出も語った。

これまで休み休みしながらの62年だった。途中下車、前途無効にならずに来た。こうしてみなさんの顔を見て、話ができることがうれしい、と語った。

身近なところから深く感じ、広く考える

「長年、部落差別と向き合ってきた。今、皆さんに伝えたいこと、思いのたけを語りたい」と自分史を振り返り、「身近なところから深く感じ、広く考える」ことが私の学んだ一点目だ、と強調。このあと、会場を歩き、一番前の席の男性に「あなたの一番身近な人は誰？」と問う。男性が少し考えて「連れ合い」と答えると、「間違い」と。「一番身近な人は自分自身だ」「自分を抜いたらあかん。自分と向き合うことだ」「身近な問題に気付かないといけない」と言い、自身の経験を話した。

次に、「いのち・生き合う」ことをめぐって、「ここはだれにも見えないけれど、こころづかいは見える。思いは見えないけれど、思いやりはだれでも見える」(宮澤章二「行為の意味」)、「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」(金子みすゞ「星とたんぽぽ」)を挙げ、「感性と想像力」の大切さを力説した。

自分と向き合い、自己内対話を重ねる

続いて、「私が心していること」を語った。「私は部落解放運動の中で、部落民でない藤田君に何がわかるか」と言われてきた。しかし、私は「疑問を絶対に手放さなかった」。その時に思い出すのが子どもたちの「四つの願い」だ。「話を聞いてほしい」「決めつけないでほしい」「早くと急かさな



いほしい」「なぜ、どうして、を大切にしてほしい」。藤田さんが子どもたちの感想文から見つけたものだ。

最後に、「人間」ということばに触れた。「水平社宣言」に10回出てくる。私たちは差別－被差別の間で生きている。「人間をどう見るのか」。人間観、生き合い方観、生き方観を深めることだ。そのためには、自分と向き合い、自己内対話を重ねることだ、と語った。

参加者の感想や質問にも応答。胸にしみる話に笑いも加わり、とても心地良い時間を皆で共有できた。



■ 次回学習会(12月5日)のご案内

次回の学習会は12月5日(土)午前10時から、三宅町中央公民館で開く。講師は元関西大学教員の石元清英さん。学習テーマは「意識調査から見る部落への眼差し－差別意識をどう考えるか」。石元さんの問題提起を受けて議論し合う。ご参加ください。

コロナ禍のまちづくりを考える

三宅町人権学習講座で浅井智子さんが語る

三宅町人権学習講座が9月15日、中央公民館で

あった＝写真。3回目のこの日は県社会福祉協議会



地域福祉課の浅井智子さんが「困窮者支援事業の現場からまちづくりを考える～コロナ社会で問われていること～」と題して話をした＝写真。

浅井さんは、私たちの生命や暮らしが今、新型コロナウイルスで脅かされている。このコロナ禍で社会の中に潜んでいた様々な矛盾や課題が表出。これは「災害」と言える。生活困難者が激増している。持続化給付金や雇用調整金は必要な時に届かなかった。

コロナ禍で社会福祉協議会には相談が相次いでい

る。生活福祉資金貸付制度(特例制度)をいち早く活用してもらった。今は、4月、5月に比べると若い世代が増えた。6、70代も一定数いる。最近では、対人を伴う職業から製造業・建設業の人たちからの相談が増えている。経済が回らないことが起因している。



一人親家庭、高齢労働者、外国籍労働者など、社会的に弱い立場の人たちに大きな影響が出ている。

生活困窮者自立支援制度は作り直していくもの

生活困窮者自立支援制度は、あらゆる支援のはざまを埋めていく。セーフネットを厚くする。早めに見つけて支援していくことが目的。そのため、本人の尊厳を守りつつ、地域の支援者とネットワークを作っていくなどして、制度そのものを作り直していくものだという。

社会福祉協議会が委託を受ける県中和・吉野生活自立サポートセンターの取り組みを紹介するとともに、悩みを聞きながら就労につなげていくなど、一人ひと

りに合わせた取り組みでゴールを目指している。

コロナ禍で地域福祉も揺れている。悩み、模索する中、活動は休止しても、「思考は止めない」。そんな中でも地域の支援を一步ずつ続けている。地域での話し合いや合意形成を行い、集まれなくても繋がれる新しいアイデアと工夫を取り入れた活動を進め、領域や立場を超えて地域で共同する多様な主体が共同した新しい支援の創出を始めている、と語った。

また、県社会福祉協議会では、「福祉の歩みを止めない宣言」を出している。宣言は今、それぞれの立場でできることを実行しようと謳っている、と紹介した。

このほか、日本赤十字社が作成したスライド「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう～負のスパイラルを断ち切るために」を上映。コロナ禍での対応を提起した。

天理市南部の史蹟を学ぶ

河合町人権学習講座(全4回)がスタート

河合町人権学習講座が9月25日にスタートした。

奥野賢照・町人権教育推進協議会会長があいさつ。吉田栄治郎・世界人権問題研究センター



研究員が次回講座で実施するフィールドワークの事前学習として「天理市南部を歩くー山辺の道周辺の墓地と古墳」をテーマに話をした。

フィールドワークは10月23日に実施する。吉田さんは、長岳寺は境内(巡礼地)入口に四国四十八カ所にならって順路が設けられ、石堂があって、庶民信仰の対象になっていたこと。



柳本郷墓では、行基供養碑や等覚門・妙覚門の鳥居(一種の结界)の存在とともに、葬送に関わった三昧聖や「口寄せ」を行った巫女などが存在したこと。また、崇仁天皇陵は文久3(1863)年に比定と修復。さらに、黒塚古墳(展示館)、柳本城、陣屋跡について話をした。

宇陀・榛原界隈を地域探索

県民歴史講座がフィールドワークを実施

「県民歴史講座」のフィールドワークが9月29日にあった。テーマは「宇陀榛原周辺の地域社会と生活文化」。コースは近鉄榛原駅-宇陀川分水工事跡-宇太水分(写真。うだみくまり)神社-墨坂神社-伊勢本街道-恵比寿神社-榛原空襲跡-青越伊勢街道・宗祐寺-伊勢街道分岐-あぶらや-新町-榛原駅。県同和問題関係史料センターの竹田祥子さんと竹中緑さんが案内した。



この地域は古代から大和と伊勢を結ぶ交通の要所。中世には萩原の地に関所が置かれ、江戸時代には宿場町として栄えた。初瀬から西峠を越えてきた伊勢本街道は、「札ノ辻」で東に分岐する街道(青越伊勢街道)と三又路をつくる。三又路には、道標や太神宮燈籠(文政11/1828年)がある。この「札ノ辻」には江戸時代後半から明治10(1877)年まで営業した旅館「あぶらや」(写真)がある。現在は宇陀市歴史文化館として公開されている。



歴史的遺跡が数多く残る伊勢街道沿い

宇陀川の分水跡では、「明治の三老農」のひとり中村直三(農事改良家)が幕末文久年間(1861)に関わった史料を紹介。戦後、大規模な河川改修工事が行われて、現在の姿になった。

この地には、「水の分配を司る神」の宇太水分神社。芳野川沿いの惣社水分神社。古市場の宇太水分神社の三社がある。祭礼などには「穢多村」が関わっていたとの史料が残る。

墨坂神社は神武天皇東征伝承の1つで『日本書

紀』にも紹介されている。もともと西峠にあり、文安6(1449)年に現在地に移ったと伝わる。西峠には伝承の碑が建っている。

恵比寿神社は伊勢街道沿いの町場に形成され、祭神は恵比寿大明神で商売繁盛の神として信仰を集めた。榛原空襲跡は1945年7月24日、榛原駅付近を走行中の電車に対するアメリカ軍戦闘機による機銃掃射で、死者11人、負傷者27人が出た。その痕がガード下に保存されている。

青越伊勢街道は伊勢本街道を萩原札ノ辻で分岐し、宗祐寺の門前を経て、宇陀川沿いに三本松(現宇陀市室生三本松)や、名張(現三重県名張市)から伊勢に向かう街道。宗祐寺は融通念仏宗の開祖良忍が天承元(1131)年にこの地に多聞院を設け、融通念仏を教えたとされる。

琉球人遺骨返還請求でシンポ

「学知の植民地主義を考える」と題した琉球人遺骨返還請求訴訟シンポジウムが10月11日、龍谷大学響都ホールであった=写真。

パネラーは太田好信・九州大学名誉教授、松島泰勝・龍大教授、支援する会の崎浜盛喜さんの3人。

京都大学や東京大学、北海道大学は「学術研



究」の名の下、遺族の同意を得ずにアイヌや沖縄の人々の遺骨を盗掘。放置してきた。

シンポでは、「帝国主義を前提としていた」(太田)、「植民地主義的視点で行われており、差別主義」(松島)、「遺骨研究は琉球精神文化の破壊」(崎浜)と指摘した。

次回学習会は11月18日午後6時から、同会場で。『京大よ、返せー琉球人遺骨は訴える』出版記念を兼ねて開く。第7回公判は11月19日午後2時半から。

山本栄子さんが部落問題を語る

ひょうご部落解放・人権研究所のセミナーで

ひょうご部落解放・人権研究所の「人権セミナー」が10月3日、神戸であった。講師は山本栄子さん(著書『歩-識字を求め、部落差別と闘い続ける』)と、山本崇記さん(静岡大学准教授)。「いま、部落問題を語る-新たな出会いを求めて」のテーマで話をした。



石元清英・所長があいさつ。山本崇記さんが栄子さんとの出会いと、共編の『いま、部落問題を語る』の出版経過を語り、栄子さんが思いを語る映像を紹介。そのあと、①被差別部落に生まれて(1931~)②部落解放運動との出会い(1950年代後半~)③識字教室を開設(1970年代前半~)④学びなおしの過程と苦勞(1990年代~)⑤これからに向けて(2010年代~)に沿って、スライド写真を交えながら



編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

時の政権が何かことを起こすたびに、野党やメディアは「説明責任を果たせ」と。これに対して政権は「丁寧に説明していきたい」と。大体がこれの繰り返し。メディア側もそれ以上深追いしない。政権側はこれで乗り切ってきた。今や余裕だ。国会抜きに恣意的に権力行使する。説明はしない。フェイクは連発する。文書は改ざんする。歴代の解釈も変更する。こんな正義も真実もない不合理な悪政が横行すると、どうなるのか。多くの人たちは諦めの心境になり、ますます政治から離れる。政権は全権委任のごとく振る舞う。こんなことが許されないことぐらい誰にでもわかる。それこそ何の説明も要らない。

山本崇記さんが聞き手となって栄子さんが語った。

自宅を開放し識字学級を始め、著書を出版

栄子さんは1931年、京都の西三条で生まれた。小学校を卒業後、働きに出る。1950年代後半に部落解放運動と出会う。朝田善之助さんとの出会いと、「朝田学校」で「様々な人との出会いと学び」を体験する。その後、自宅を開放し、同じ悩みを持つ母親たちと識字学級を始める。40代から「給食調理員」に。その後、夜間中学から定時制高校へ。さらに、69歳で大学に進学する。



栄子さんのゆっくりと話す語りに聞き入った。とくに、大学での学びを断念。2003年の京都市協における「補助金不正受給問題」の過程で山内政夫さん(市協議長)と一緒に市協事務局長を引き受け、組織の整理と問題の対処に奮闘したとの話には、驚かされた。

■ 三宅支局で33回目の偲ぶ集い

33回目の偲ぶ集いが9月7日、上但馬団地の「老人憩いの家」前であった。部落解放同盟上但馬支部が1969年9月7日に結成され、住宅要求闘争を展開。上但馬団地が出来た。地域のおばちゃんや青年たちと金城実さんが一緒につくった、この場に建つ地蔵さんも微笑んでいた。



ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/